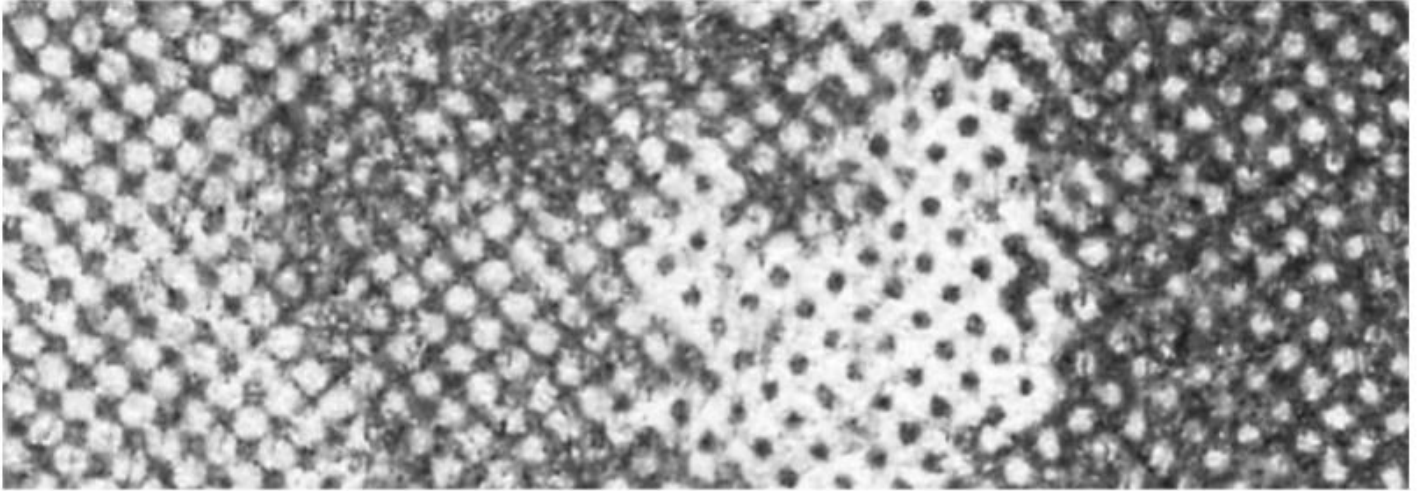


OBONソサエティ：11月に3件が返還される

2019年11月 日本への旅



点をつなぐ

今年になって間もなく私達は、第2次世界大戦終戦以降ずっとカナダで保管されていた、戦地からの土産の品々が詰まった4つの箱を受け取りました。その時点では知る由もありませんでしたが、この箱を送ってきた人物は後に、今まで私達が会った中で最も興味深く注目せずにいられない一人となりました。

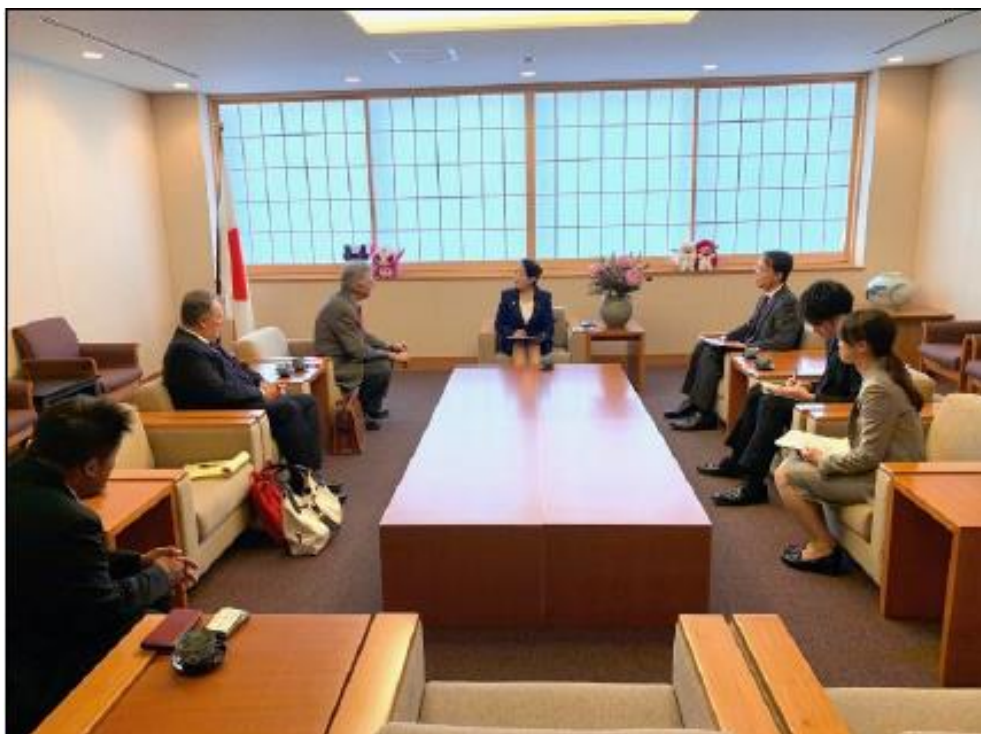
我々の搜索班は箱の中の品々について様々に調査を進め、点を繋いでいくうちに間もなく、箱に入っていた小さなアルバムにつながるご遺族を探し出しました。箱を送ってきた紳士にこの吉報を知らせ話をするうちに、彼はそのご遺族に個人的に会いたいと言い出しました。それはやがて、大変に珍しい経歴を持つ彼から湧き出るアイディアや、彼が日本から遥か遠く離れたケニアのナイロビ在住ということからも、今までに例を見ない特別なものとなりました。

搜索班は更に多くの点をつなぎ別のご遺族を、更にまた別のご遺族を探し出しました。OBONソサエティでは、色々と協議が必要な案件などもあり、最終的にレックスと敬子は、自身が日本を訪れ、日本側スタッフと会い、3件の遺品返還式に参列しようと決めました。同時に、遠くナイロビから訪れる紳士にも会って行動を共にするのです。



東京に着いた私達は、すぐにスタッフと協議し、また如何にして各々の機能を融合させ搜索過程を効率化するかを何時間も話し合いました。

その日の夕方遅くジャラット・チョプラ博士がアフリカから到着し、私達は深夜にうどんを楽しみながら互いを知り合い、翌日からの行動を話し合いました。翌朝は靖国神社の宮司さんや外務省の副大臣と会いました。



その後私達は、有名な外国特派員協会と大阪の関西プレスクラブで記者会見しました。



報道陣に囲まれる中、ご遺族へご遺品を返還する時が来ました。その小さなアルバムは、四方さんご一家につながるものでした。30年の間これらの遺品の返還を試み続けてきたチョプラ博士が、この日の為にナイロビから22時間かけて飛んできたことは、彼の誠意の現われです。この地域の沢山の住人達が、四方家の戦没されたお兄さんの遺品返還を見届けに集まりました。



OBONソサエティはアルバムの中から何枚かの写真を拡大し、地域の人たちも見えるよう準備していました。驚いたことに、四方さんは直ぐにそのうちの1枚が自分達の家族写真だと判り、半ズボンと白シャツ姿の少年をご自身だと指さしました。この写真は、戦地にいる兄達を安心させようと、女も子供も家族全員が田んぼに入り、兄達が留守の間も皆で元気に働いている様子を撮ったんだと説明してくれました。



戦没されたお兄さんの魂を迎えるために墓参りをした後、四方家の皆さんは私達をご自宅へお茶に招待してくれました。



このアルバムの中に、戦時中の地方新聞の小さな切り抜きが入っていました。どうやらお母さまが切り抜き、75年前フィリピンに配属されていた息子へ宛てて送ったようです。この小さな記事からOBONソサエティの捜索班が糸口を見つけ、ご遺族を探し出したのです。



四方秀雄氏

翌日は早起きして次の返還式へ出発しました。行き先は静岡県内の中規模の都市で、返還式は市長室で執り行われることになっています。職員さんが、未帰還兵である永澤氏の甥御さんが待っている小部屋へ案内してくれました。彼は叔父さんの遺影や書類入りの封筒を持参されていました。



左：私達は市長室へ移動し、返還式が執り行われました。永澤さんは叔父さんの遺影を胸に抱かれました。

上：市長と地元の職員たちは、今も地元が存在する多くの姓名の署名を確認しながらじっくりと旗を検分していました。



この旗は、アメリカ合衆国ウィスコンシン州のチペワ郡歴史協会に長年に渡って展示されていたもので、その職員が日本のご遺族にお返ししたいと願って返還されたものでした。

その後、京都へ移動した私達は、日章旗の返還式が予定されている京都市の副市長室へ案内されました。



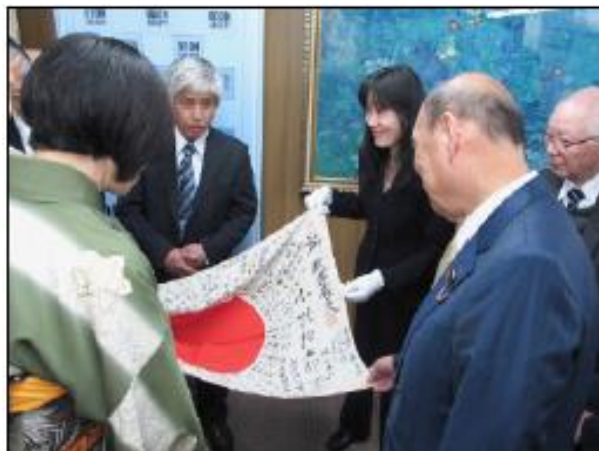
村上副市長は美しい着物姿で、この式に臨まれました。

未帰還兵の叔父の遺品を受領するために、小林家を代表して4人の甥御さん達が返還式に出席されました。彼らは叔父さんの遺影を持参されていました。



上：フィリピンで撮影されたらしい叔父の小林松五郎氏の遺影。

下：日章旗が敬子から最年長の甥御さんへ手渡されると、甥御さん達はすぐに旗を広げ、署名の一つ一つを検分されました。





返還式の終わりに、最年長の甥御さんが不思議な話をしてくれました。近頃仕事を退職され、長年の目標であった西国三十三所の観音巡礼を果たされたというのです。寺社を巡り歩きながら、ずっと先祖のことを思い祈っていたそうです。その後、この旅から帰宅して1週間も経たないうちに、未帰還兵だった叔父の遺品が見つかった、という知らせを受け取ったということでした。

ジャラット・チョプラ博士は、始めは幾分不可解な人物に思われました。私達は彼の個人的な詮索はしませんでした。彼を明確に裏付ける経歴がありました。数か月の間に交わしたEメールの中に度々その細かな部分が見え隠れしていたのですが、ある時、私達は11ページに及ぶ彼の経歴を読み、彼が勇猛果敢な先祖の末裔で、人智にあふれ、懐の広い紳士だと理解し始めました。



国連で働くチョプラ博士は、地球上の無政府状態地域へ赴き、医療提供や食糧援助をするために、その土地の武装指導者や分裂した軍の部隊らとの交渉を託される人でした。国連はエルサルバドルや東ティモール、イラク北部、ソマリアなど他の人は訪れるのをためらう地域での、彼の類い稀な交渉術を頼りにしています。彼はまた、平和維持活動、国際法や紛争解決の第一人者でした。

彼の家系は古くインド出身です。私達が彼の先祖について尋ねると、アレキサンダー大王の東方侵略に異議を唱えたという親族の名前を口にしたのです。もっと近代になると、彼の親族は1849年、英国の東インド会社侵攻に対抗したことへの罰としてひどい目にあいました。先祖伝来の家宝の刀剣を、戦利品として英国へ持ち去られたのです。近年では、英国軍医であった大叔父が、1942年のシンガポール攻略の間に殺されました。

てきぱきして博識で、人懐っこく思いやりがあり非常に親切な心の持ち主である彼と過ごす毎日とはとても楽しいものでした。私達は彼に、一緒に出席したインタビューや会議について分析してもらうと、彼の解析した洞察は、私達には見えない、全く驚くものでした。彼の頭にはレントゲンのように見ながら明確に浮かんでくるので、部屋の中にいる高官について読み解き、政治的な位置や画策を評価することが出来ました。

とは言っても、彼は殿様気取りの人ではありません。地下鉄に乗るのも、大衆食堂での食事でも全く平気だし、ベッドと壁の間をかるうじて通れるくらいに狭くて安いビジネスホテルでも気にしないのです。東京に着いて最初の朝、彼は幼い自分の娘に手紙を書いて送るので切手を買う郵便局を探したいと言いました。「それは一」という彼の説明によると、「この頃の便利なEメールでは、大切に思えるものは作り出せない。だから私は、いつか娘がこれを大事に取っておこうと思ってくれるよう、手紙を書き切手を貼って送りたいのです。」